

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：32682

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2023

課題番号：26770230

研究課題名（和文）転封大名の新領における「藩」構築過程の分析

研究課題名（英文）The process of constructing the Han in the new domain of a fief-changed feudal lord

研究代表者

日比 佳代子（HIBI, KAYOKO）

明治大学・学術・社会連携部博物館事務室・専任職員

研究者番号：40468830

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1747年の内藤家の磐城平から延岡への転封を対象に、転封が藩に与える影響を分析した。この転封で領地が遠い九州に変更されたため、経済的理由だけでなく、人と情報を江戸と延岡で安定的にやり取りするためにも、内藤家は新規に大坂蔵屋敷を持った。その際、大坂詰の役人には、転封時に大坂で藩士の移動手配をした者達がそのままあてられている。また、内藤家は九州の大名との関係は薄かったが、前領主から交際方法の引き継ぎを受け、近隣大名と書状のやり取りが可能になった。その書状の交換についても、その後は大坂で行われるようになる。内藤家にとって、経済面以外でも大坂に拠点を持つ事は重要な意味があったのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の転封研究は政治的問題や貢租問題などについて論じられる事が多く、転封が藩に与える影響や藩が新領に適応していく過程などは論じられる事がなかった。本研究では、この課題の重要性を指摘し、大名と領地・領民との関係を分析するという転封研究の新しい可能性を示した。また、内藤家文書に含まれる転封関係文書や転封時の藩の日記を網羅的に調査し、転封前後の日記や書状留のデータベース化、内藤藩を分析する上での基礎史料となる藩の役職書き上げと内藤家の親族関係史料の翻刻公開を行い、研究環境の整備を進めた。さらに、本研究で得られた成果をもとに展示を2回開催し、研究の成果を広く社会に還元した。

研究成果の概要（英文）：This study analyzes the impact of fief change on the Han based on the Naito clan's transfer from Iwakitaira to Nobeoka in 1747. Since their domain had been changed to distant Kyushu, the Naito clan maintained a new rice warehouse in Osaka, not only for economic reasons, but also for the stable movement of people and information between Edo and Nobeoka. Vassals in Osaka were recruited from among those who had been sent there to take care of vassals moving to Nobeoka with the fief change. The Naito clan was not well connected with the feudal lords in Kyushu, but had taken over the method of communication from a former lord and were soon able to exchange letters with neighboring lords. The letters would then be exchanged in Osaka. For the Naito clan, having a base in Osaka was important for reasons other than economic.

研究分野：日本史

キーワード：転封 藩 書状 藩政史料 飛脚 大坂蔵屋敷

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

従来の転封に関わる研究は政治的問題や貢租問題などについて論じられる事が多く、転封が藩に与える具体的な影響を論じるものはなかった。藩が転封する様子を追っていくと、3,4ヶ月の準備期間で所領を移動し、入封後すぐに新領での統治を開始する。さらに、所領の地理的な条件に従い市場や公儀役負担の変化に対応し、地域社会と関係を取り結んで、領地・領民と一体性を有した「藩」を短期間で構築してゆく。藩にかかわる多くの要素を含む重要な過程でありながら、この間の動きは、特に実務レベルにおいて殆ど明らかにされてこなかった。このような研究状況に対して、本研究では転封が藩に与える具体的な影響を検討することとした。

2. 研究の目的

これまで、転封が藩に与える具体的な影響について明らかにされて来なかったのは、転封前後の記録を残す大名家文書がなかった事も原因の一つであった。しかし、延享4年(1747)に磐城平から延岡へ転封した譜代大名内藤家の文書は、転封の引き継ぎ文書や転封前後の藩の記録を多く含んでいる。本研究では、この内藤家文書を素材として、内藤家の延享4年(1747)の磐城平から延岡への転封において、藩がどのような影響をうけたか、藩が新領に適応していく過程を明らかにする。

3. 研究の方法

明治大学博物館刑事部門が所蔵する内藤家文書に含まれる転封関係文書、転封の年である延享4年(1747)前後の時期の各役職の書状留や日記について悉皆調査を行う。加えて、藩士の履歴をまとめた由緒書や、藩の役職の全体像や転封前後の役職の変化を示す史料について調査を行う。その上でとくに重要な史料はデータベースの作成や史料翻刻をおこない、転封時に藩内でどのような動きがあるのか、藩の組織にどのような変化が見られるのかを検討する。

4. 研究成果

内藤家文書のうち、転封関係史料、転封前後の日記や書状留、家臣団や内藤家の親族に関する史料、江戸藩邸及び大坂蔵屋敷関係史料の調査を行った。これらの史料のうちから、転封前後の時期を含む内藤家家臣団の由緒書のデータベース作成、転封前後の延享3年(1746)から寛延2年(1749)の間の国元・江戸の御用部屋と国元書方の日記内容のデータベース作成を行った。また、大坂蔵屋敷関係記録についても、寛政4年(1792)は目付関係の、天保4年(1833)は御用部屋関係の、大坂と江戸・国元の書状の送受信に関する記録のデータベース作成を行った。さらに、内藤藩の藩政組織を理解する上での基礎史料といえる、藩初から幕末までの上級役職と就任藩士、その禄高を書き上げた「御役人前録」を翻刻し史料集として刊行した(日比佳代子編集『内藤家文書 御役人前録』、2022年)。加えて、内藤家の親族関係やそこから発展した両敵関係を把握する上で欠かすことのできない3点の史料を翻刻公開した(「内藤家親族関係史料」『明治大学博物館年報 2022年度』、2024年)。これらの調査と重要史料のデータベース化、翻刻公開によって、延享4年(1747)の転封は勿論、内藤藩の研究全般を行う上での研究環境の整備を進めることができた。

上記の史料を用いて、まずは藩の活動の領域が江戸と遠国の延岡へ広がったことに対する藩の対応や藩の組織の変容を分析した。この問題に関しては、転封を機に新たに設置された大坂蔵屋敷に注目し、転封時の大坂蔵屋敷の役割を明らかにした。さらに、転封後は、転封時に大坂に派遣され、江戸以西の藩士の移動の手配、前領主牧野家の大坂役人との打ち合わせなどを担った藩士達が、そのまま大坂蔵屋敷の役人になったこと、転封後の大坂蔵屋敷の組織の改編などを分析して、「内藤藩の大坂屋敷 延享四年の転封を基点に」(『明治大学博物館研究紀要 22』2017年)として公開した。その後の大坂蔵屋敷は、経済的な役割だけではなく、江戸と遠国の延岡をつなぐ、人と情報の中継地としての役割も果たすことになる。これに関わって、学会発表「大坂屋敷をめぐる記録管理について～内藤藩の事例から～」(科学研究費基盤研究B(代表岩城卓二)「幕末期における大坂・大坂城の軍事的役割と畿内近国藩」他2団体合同研究会)において、内藤藩の大坂関係記録の全体像や大坂蔵屋敷の藩政上の役割と記録発生の仕組みについて報告を行った。

つづいて、内藤藩の新領への適応過程の一つとして、近隣大名との関係に注目した。内藤家は、転封時に前領主の牧野家から近隣大名との交際に関する詳細な引き継ぎを受けており、転封直後から江戸ではなく国元において近隣大名と書状のやり取りを行っている。内藤家が磐城平を領地としていた時には、国元で近隣大名と頻りに書状をやり取りする様子はみられず、これは九州大名の特徴的な交際のあり方であった。さらに、その後、書状交換の場所は、大坂に移っていく事も確認された。この問題については、論文「延岡藩内藤家と近隣大名との交際 延享四年の転封を起点に」(中野等編『中近世九州・西国史研究』2024年)において公開した。近隣大名との交際という側面においても、大坂蔵屋敷の重要性、西国の情報が集まる場所としての大坂の重要性が明らかになったと言える。内藤家にとって大坂に拠点を持つことは、経済的な側面以外にも重要な意味があったのである。

また、内藤家は延岡への転封によって実高が大きく下がったこともあり、磐城平時代の家臣団規模をそのまま維持することは難しく、新領地に適応した家臣団を再構成する必要に迫られる。さらに、在地と直接関わる下級藩士は在地の実情に通じた者である必要もあり、転封前後でこの層に入れ替わりが見られる。この問題に関して、特に在地性を前提に藩と関係を結んでいたのが

郷土層であることから、磐城平藩時代の郷土が転封によってどのような扱いを受けたのかを、「転封における郷土の処遇」(近世法史研究会、2023年)として報告した。

この他、延享4年(1747)の内藤藩の転封の全体像、江戸と国元との関係、東国から西国への領地移動の影響などを取り上げた展示を2度開催して、本研究で得られた成果を広く社会に還元し、それぞれの展示について図録『藩領と江戸藩邸』(明治大学博物館、2014)、図録『新しいお殿様 所替・その後』(明治大学博物館、2022)を刊行した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 日比佳代子	4. 巻 2022年度
2. 論文標題 内藤家親族関係史料	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 明治大学博物館年報	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 日比佳代子	4. 巻 2022年度
2. 論文標題 内藤家親族関係史料	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 明治大学博物館年報	6. 最初と最後の頁 1 - 14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 日比佳代子	4. 巻 80
2. 論文標題 逃げた足軽	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 MUSEUM EYES	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 日比佳代子	4. 巻 77
2. 論文標題 江戸時代における絵図の管理	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 MUSEUM EYES	6. 最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 日比佳代子	4. 巻 75
2. 論文標題 内藤藩、江戸虎ノ門屋敷の風景	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 MUSEUM EYES	6. 最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 日比佳代子	4. 巻 69
2. 論文標題 転封こぼれ話2 - 転封と菩提寺	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 MUSEUM EYES	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 日比佳代子	4. 巻 22
2. 論文標題 内藤藩の大坂屋敷-延享四年の転封を基点に-	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 明治大学博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 日比佳代子	4. 巻 640
2. 論文標題 書評 吉村豊雄著『日本近世の行政と地域社会』	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 62 - 69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 日比佳代子
2. 発表標題 転封における郷士の処遇
3. 学会等名 近世法史研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 日比佳代子
2. 発表標題 大坂屋敷をめぐる記録管理について - 内藤藩の事例から
3. 学会等名 科学研究費基盤研究B（代表岩城卓二）「幕末期における大坂・大坂城の軍事的役割と畿内近国藩」他2団体合同研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 日比佳代子他	4. 発行年 2024年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 384
3. 書名 中野等編『中近世九州・西国史研究』	

1. 著者名 日比佳代子編集	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明治大学博物館	5. 総ページ数 120
3. 書名 展示図録 新しいお殿様―所替・その後―	

1. 著者名 日比佳代子編集	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明治大学博物館	5. 総ページ数 159
3. 書名 内藤家文書 御役人前録	

1. 著者名 日比佳代子、白石直樹、松川昌弘	4. 発行年 2014年
2. 出版社 明治大学博物館	5. 総ページ数 77
3. 書名 藩領と江戸藩邸	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------